

校長室だより～和光高校今昔 第38号 H27.1.23

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

集団宿泊研修（スキー研修）の思い出

それは、学年主任仲尾利夫先生の思い付きから始まった。

「石丸君、スキーの企画やっというて～」京都訛りの残る独特のおっとりしたそして有無を言わせない口調がその行事の発端であった。昭和58年入学の12期生、仲尾学年最初の学年会議での話であった。この3年前に実施した1学年校外行事・臨海学校は成功裡に終わったものの学生らの助教確保が困難なためその後の2回は、林間学校をおこなっている。ただし、実施の7月段階ではまだ十分な理解と指導が確立していないため、生徒指導上の課題が垣間見られるなど苦勞と教育効果との狭間に悩みも抱えていた。仲尾は学年主任となるとすぐにかつてより温めていた構想を確認した。「集団宿泊研修」という行事に「スキー」を組み合わせることができないかと。結果はOK、ここに学校はおるか県内初の試みがスタートした。

当時スキーは若者文化の象徴として大流行していた。ただし移動や道具の準備などどちらかと言えば贅沢なレジャーの一つであった。スキー修学旅行も流行るとまではいかずいくつかの学校で試験的に行うくらいで、専ら希望者による「スキー教室」{…スキーに長けた体育科の先生方を中心に希望生徒を募り、バス数台で冬休み中に実施する。部活動に出なくてもいいので運動部の生徒達が参加することが多い}花盛りの頃であった。

仲尾曰く、①実施が3学期なので十分に生徒指導が確立しているはずである ②スキーはレジャー（遊び）ではなくスポーツである。生涯スポーツとして早いうちに慣れ親しむことは大切である ③新しい行事を創設することは和光高校のイメージアップにつながる

決して全員が賛成という訳ではなかったが、「12期生は7月の林間学校ではなく2月にスキーを主とする



集団宿泊研修を実施する」ことが決まった。

なにしろ初めての行事であったので担当の石丸は苦勞した。日程・場所・目的・内容など「やっというて」にはこれらが全て含まれるのだ。結果、昭和59年2月1日から3日までの日程で、群馬県大穴スキー場での実施が決まった。「大穴？」誰も知らないスキー場であった。利点は宿泊旅館「奥利根館」から近いことのみ。奥利根館は雪見露天風呂が有名な結構高級な旅館であった。

スキー道具のレンタルやスキー講習など数年後にはスムーズに運ぶ事柄もまだ業者自体がそれほど慣れていない時代。準備も本番もとても疲れたことがいまだに思い出される。何よりの誤算は、1年1組が月日を重ねるごとに悪化！の一途を辿ったこと。極めつけは宿舎の壁に飾られた「亀のはく製」を部屋に持ち去ったこと。「何で？…」と当時は絶句したが今となればこれも良き思い出。このことに象徴される多難な行事となり、評価はこの後実施されなかったことが証明している。

しかし、生徒達にはかなり評判が良かったようだ。そして付け加えるならば、この半年後に行われた修学旅行（瀬戸内・京都）では、この反省が生きたのか、多分最高の（当時としては異例の問題行動0に加え、集合やグループ行動の中身・帰着時間などほぼ完璧）行事となった。東京駅での解散時に思いがけず生徒達から驚くような大きな拍手が湧いた時には涙が出たものだ。それは同時に、苦樂を共にした学年団の絆の深まりの賜物でもある。思えば、スキーのプロ、佐藤正人か武井正人かと言われた転任1年目の武井先生と仲良くなったのもこの「スキー」のおかげだ。涼しげなバンダナ姿が今でも目に浮かぶ。

生徒の部屋を回って「他部屋侵入」のないことを確認した後、担任みんなで深夜に入った露天風呂は、雪の演出もあり、掲示されている効能以上のサプリを我々に与えてくれた。そうしてみると1組の担任はこれが狙いだったのかもしれないと思えてくる。

